

説教 「いのちを見出す道」

(ヨブ記1章9-12節 マタイによる福音書16章21-28節)

2021年3月7日(日) 主日礼拝
日本基督教団 仙川教会

大串肇牧師

このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。(21節)

イエスは弟子たちにご受難と死そして復活の出来事を予告いたしました。実は3度イエスは弟子たちに同じような予告を繰り返します。今朝の聖書個所が最初の予告です。「弟子たちに打ち明け始められた」と訳されていますが、聖書の原文でははっきり「示した」という言葉です。古い伝承を保持するマルコ福音書では「教えた」という言葉ですから、マタイ独自の表現です。これまではイエスのご自身のご受難についてあまりはっきりとは語っていませんでした。しかしペトロはイエスの事を聞かれて、イエスが「メシア、生ける神の子」であると告白しました。その直後に、ご自身がエルサレムに行き、当時の指導者であった長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に「復活することになっている」という事実をイエスははっきりと示されました。というのは、イエスのご受難と十字架そして復活こそ、ご自身がメシアであり、神の子であることを明らかに指し示す事実だったからです。「三日目に復活することになっている」と言われています。原語「デイ」(δει)という語は「～する必要がある」「～しなければならない」という意味です。直訳するならば「復活しなければならない」となるでしょう。復活は神のご計画です。また、イエス「復活する」と言われていますが、ほんとうは「復活させられる」という訳が正確です。ですから、復活はイエスの単独の業ではなく、まさしく神の御業であり、ご計画なのです。言い換えれば、神のご計画とご意志にイエスは忠実に従った神の僕なのです。ところが、そのイエスの受難予告を聞いたペトロは激しく抗議いたしました:「すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」(22節)

イエスをいさめたペテロはイエスをメシアであると理解していました。しかし、あくまでも彼自身の思いや考えでそう語ったのですが、それが正しくなかった、間違っていたのです。ペトロが考えていたメシアとは当時のユダ人たちが抱いていたイメージのままでした。つまり、英雄のように力と権威をもってローマ帝国を打ち倒して、イスラエルの王国を再建する人物でした。それがメシアだったのです。ですから、イエスが苦難を受け殺されてしまうなどと到底、ペトロは受け入れることが出来ませんでした。また、イエスの言うことが理解できませんでした。自分の師であるイエスをいさめ始めたのです。そこでイエスはペトロを叱責してこう語りました：「**サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。**」(23節)

イエスはペトロ自身を直接「**サタン**」と呼んでいます。しかしペトロにサタンが憑いたわけではありません。ペトロは神のご意志やご計画に従ったのではなく、自分勝手な考えや人間の尺度でイエスの事、神の事を判断していたことに気づいていなかったのです。普通ならば人は皆、勝利や華々しい成功を追い求めるかもしれません。ペトロがイエスに求めていたものも、同じでした。栄光のキリストであったのです。そして自分たちが多くのものを獲得するのが幸福と信じていたのです。しかし信仰とは獲得することではなく、むしろ放棄することなのです。イエスは他人に負担や犠牲を強いるのではなく、自分で負うべき自分の十字架を自らが負いました。こうしてイエスはわたしたちの罪の重荷を負ってくださったのです。徹底的に、神のご意志に忠実になられたのです。そして弟子たちにイエスは言われました。

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。」 (24-25 節)

「**わたしに従いなさい**」と弟子たちに語られましたように、わたしたちもまたイエスの生き方に学び、イエスに従うことへ招かれています。マタイの教会の信仰者たちはきっとこのイエスの言葉に支えられて迫害を受けながらも、自分の十字架を負い、命を捨ててまで信仰を貫きました。わたしたちは一人では神に従って生きることは出来ません。しかしイエスは必ずやわたしたちを導き、ともに歩んでくださいます。わたしたちはただその御後をついていけばいいのです。ご一緒に祈りましょう。